

辺りの空気が生活音でざわつき始める時間までにはまだ一息あった。カツは、昨夜耳にした、峰子の子が傷害事件を起こしたらしいということが気になっていた。顔色を変えて走り回っているだろう峰子が不憫でならなかった。が、今のカツでは、力になってやれぬどころか、どんなに気になってもそれからどうなったのか聞くこともできない。あれこれ思いを巡らしていたが、想像はあまり発展しない。やがてカツは、目覚める前に見ていた母親の夢を思い起こしていた。

母のお梅はランプの下で、カツが学校に履いていく藁草履を編んでくれていた。

「おかあはん」煎餅布団から幼い顔のカツが声となっていた。入口の戸の代わりに蓆をぶら下げている、昼でもうす暗い湿ったあばら家の片隅で、便臭が鼻をつくボロボロ布団の上でむき苦しい様で……。

掻き付いて号泣するカツに、「急死したわけやなし、半年も患うとつたのに！。おかあはん、お前に会いたがとつたんぞ」一人で見取った二歳違いの兄の雄一が言った。

「これるものなら、私やって、来たかった。どれほど案じて恋うたことか」カツは心の中で叫んでいた。清が居たら来させてくれたのだから、清は出征して戦地にいた。舅 姑 は梅の病気を知ると一度だけ見舞いに来させてくれた。

を掛けると、顔を上げて、「もうじき出来るぜよ」と野良仕事で日に焼けた顔を崩して答えてくれた。カツがわだかまりなく好きだった頃の、優しいおかあはんだ。

「おかあはん」思い出の糸を手繰り寄せるように、カツは心の中でつぶやいた。久しく忘れていた郷愁が込み上げてきて、泣きたいような気持ちになった。

母のお梅は終戦前の昭和十九年に、五十一歳で死んだ。カツはそのとき二十五歳ですでに嫁いでいたので、死の床にいる梅に何もしてあげられなかった。

知らせを聞いて駆けつけると、母はすでにむくろ

が、それっきり、もう行けとは言ってくれなかつた。

死ぬ五日前に一時間も自転車漕いで、

「危篤や、もうあんまり持たん、すぐ来い」と雄一が言いに来てくれたのに、「それがな、麦刈りが遅なつとんやがな。終わったら行かすぞな」と姑 はのんびりと答えた。その言葉を、カツは胸が張り裂けそうな思いで聞いた。

「お義母さんぐらいにどう言われてもええきに、来てあげればよかった」痩せた母の胸に顔を埋めて、切ない別れをしてしまった無念にむせび泣くカツは、浮き出た肋骨の凹みによれそうな垢を見て、地団駄を踏むように、そう思った。

自分が憶病なばかりに、早くに連れ合いのおとつあんに死なれて、地を這うように生きたおかあはんをこないに惨めな姿で寂しい思いのまま行かせてしもうた。そう思うと、泣いても泣いても涙は止まらなかった。

「あの時あのまま、自転車の後ろに乗せて来てやったらよかったの」さすがに不憫になったのか、そう言いながら雄一が泣き続けるカツの背中をさすってくれた。

清は跡取り息子というわけではなかった。三男だったから舅 姑が嫌なら家を出ることもできたのだが、出てもカツ夫婦には行く所がなかった。舅 姑 長男夫婦に気兼ねをしながら、カ

た。母家の田んぼを手伝いながら清の仕事も手伝い、幼い二人の子供の面倒をみた。カツは身体が幾つあっても足りぬと思うほど忙しかった。だのに、翌年薫が生まれた。清は可愛いと喜んだが、カツの心にそんな余裕はなかった。この忙しい時に、仕事のできぬ我が身にカツは苛立った。

布団に清が潜り込んで来ると、はらむことを思いカツの身体は自然とこわばった。しかし、若い清はそんなことには無頓着だ。遠慮容赦なくこじ開けて入ってくる。乳房をまさぐる大きな手が憎らしく、身体をよじってカツはあらがうのだが、押し寄せる歓喜の波にはあらがいきれず、切

ツは幼い二人の子供を連れて離れに住まわせてもらって、田んぼを手伝っていた。誰もが貧しく家が虐げられている時代ではあったが、親の死に目にも会わせてもらえない、などというのほどにでもある話ではない。カツの実家が余りに貧しいから小馬鹿にして、軽んじてのことだ。カツは貧乏人の辛さが骨身に染みみた。「おかあはん！」カツは苦勞の連続で報われることのなかった梅の亡骸に取りすがりながら、私は、何がなんでも人並に、いやそれ以上に伸し上がってやる、と悲壮な決意を固めていた。

終戦間もなく清が戦地から帰ってくると、清を追い立てるようにしてカツは働きに働い

ない吐息を漏らす自分が、カツは呪わしかった。二年後、カツはまた妊娠した。赤子ばかり連れていては仕事ができないし出費がかさむ。貧乏人の子沢山にはなりたくなかった。さりとして医者に行く金もない。暗い心で考えに考えて、カツはかねてから耳にしていた事を実行するしかないと思つた。

意を決すると、カツは夜中に家を抜け出した。途中に赤子の頭ほどの石を見つけるとそれを抱えて、近くの川に入った。予め入りやすそうな所を見つけていたのだが、重い石を抱えていたからか、寒さで身体が柔らかく動かないからか、ぬかるみで何度も滑り尻持ちを付いた。その度に、

反射的に腹を氣遣つている自分にカツは腹を立  
てながら、下半身を身を切るような冷たい水に浸  
した。歯が噛み合ぬほど身体が震えているのは、  
寒さのためか、恐さのためか、心がいきり立つて  
いるためかは、定かでなかった。

下腹がじくじく痛むまでそうしていたのだが、  
若い丈夫な身体に宿る子供はそのぐらいのこと  
ではびくともしない。カツは次の夜も次の夜も同  
じことをしなければならなかった。十月に満ちて  
産んでやれぬ限りは、何としても出ずしかないの  
だ。重い石を抱えて、身を切るような冷たい水に  
下半身を浸すと、さすがのカツも三日目には泣け  
た。しかし、泣いても泣いても止めなかったのは、

悲惨に生きた母の姿が脳裏にこびり付いていた  
からだ。

母は農家のはした仕事を手伝つてわずかばかり  
に貰うもので、五人の子供を育てた。いや、育て  
たかったというべきだろうか。結局そんなこと  
では、五人の子供は育てられなかったのだから。  
長男と次男は尋常小学校を上がるとすぐ、  
家を出て町の商家に丁稚に行つた。だが、二人と  
も一度も里帰りせぬまま、音信不通になつてしま  
つた。

「どこかで野たれ死んだんやろか？」と言つた母  
の顔は、まるで老婆のようだった。そしてカツよ  
り三歳下の末っ子の弟は、五歳の時、風邪をこ

じらせてあつけなく死んだ。栄養失調だったの  
だろう。夕方高熱が出たと思つたら、翌日の昼に  
はもう、痩せた身体は動かなくなつていた。カツ  
は何をどう考へたらいいのか分からなかった、  
ただやり切れなかった。

どんな貧しさの中にあつても、子を思う親の心  
に変わりはないのだろう。突然の末っ子の死に、  
梅はしばらく放心したようになっていた。その死  
は避けられぬものではなく、自分の甲斐性の無さ  
が死なせたのだ、と梅は激しく自分を責めている  
ようだった。五人の子供がたった二人になつて、  
この子等は何をしてでも育てねばと梅は悲壮な  
思いで決意したのだろう。それから徐々に、カツ

等の生活はよくなった。梅がわずかな金品を得る  
ために、近隣の男達の欲望を、足を広げて受け入  
れたのだ。

(以上9月23日放送分)